縄文人の来歴

―「外越」の上陸を中心にして―

李　　国　棟

【キーワード】ammonia海進・「外越」・隆起線文土器・「ほ」・DNAハプログループM７

１．縄文時代の環境

弥生文化が渡来文化であるのに対して、縄文文化は日本固有の文化であるといったような固定観念を、多くの日本人は持っているようだ。しかし環境考古学や歴史地理学の立場から考えれば、縄文文化も決して日本固有の文化とはいえない。日本の文化は最初から日本列島の外から持ち込まれてくる運命を有しているのである。

日本の著名な環境考古学者安田喜憲氏の力作『増補改訂版・世界史のなかの縄文文化』(注１)によると、33000年前からの寒冷化によって海水面が低下し、対馬陸橋と津軽海峡の「氷の橋」が出来上がった。すると、33000年前～21000年前の間に、大陸と陸続きとなっていた日本列島には大陸の北部から大型有蹄類動物が移動してきて、それらを追う人びとも次々にやってきたという。念を押すまでもなく、大陸の北部からやってきた彼らは日本列島の最初の住民であり、彼らが持ってきた石器文化は日本列島における最初の文化であった。しかし、われわれは決して彼らの石器文化を「縄文文化」とは呼ばない。実際には、縄文文化はその石器文化の後に日本列島の外から持ち込まれてきた文化であるので、日本列島における最初の文化ではないという意味でも、日本固有とはいえないわけである。

21000年前～18000年前の間に気候が温暖化の兆しが現れ、親潮が一時津軽海峡から日本海に流入したようであったが、その後、温暖化の間歇によって津軽海峡がまたその開口を閉ざした。しかし15000年前から、気候の温暖化が本格的に始まり、ammonia海進が発生した。中国の著名な歴史地理学者陳橋駅氏の『呉越文化論叢』(注２)によると、23000年前の東シナ海は、海水面が今より136メートルほど低く、今は東シナ海の底となっている東シナ海大陸棚がほとんど露出していた。だが15000年前のammonia海進が発生すると、海水面が次第に上昇し、12000年前の海水面は今よりマイナス110メートルに達し、11000年前の海水面は今よりマイナス60メートルにまで到達した。その結果、東シナ海が出現したわけだが、その後、海水面がさらに上昇し、8000年ほど前には今よりマイナス５メートルに、6000年ほど前には今よりプラス12メートルと考えられる水準にまで上昇してしまったという。一方、日本の学者の研究では、海進によって11500年前に対馬陸橋が一時断裂し、対馬暖流が日本海に流入したが、その後、寒冷気候の逆襲によってまた止まっ

てしまった。しかし8500年前には対馬陸橋がふたたび断裂し、対馬暖流が本格的に日本海に流入した。その結果、日本列島の気候は寒冷で乾燥した大陸性気候から温暖多雨多雪の海洋性気候に変わり、ブナ林やスギ林など温暖多雨多雪の海洋性気候に適応する森が次第に日本列島を北上し、縄文文化の誕生の礎となる環境を提供することになった。要するに、15000年前以降、とりわけ13000年前から日本列島周辺の環境が気候の温暖化によって大きく変化したため、海外から新しいグループの人びとがまた次々に日本列島に移住し、彼らの文化も自然に日本列島に持ち込まれてきたわけだが、のちに彼らの文化を原型にして発展してきたのが縄文文化であった。もし33000年前～21000年前に日本列島に渡ってきた人びとの立場から、13000年ほど前から日本列島に現れたこの縄文文化を見ると、縄文文化はまぎれもなく渡来文化と呼ぶべきであろう。

2．縄文人の古里

縄文文化を創った縄文人はいったいどこからやってきたのだろうか？日本の人類学者埴原和郎（はにはらかずろう）氏の名著『日本人の骨とルーツ』(注3)の第１章によると、これまでに北京原人のような原人が日本列島に南下した「南下説」と、東南アジアのスンダランドに住んでいた原人が日本列島に北上した「北上説」と、「南北折衷説」が提出されているという。この三説の中で、埴原和郎氏自身は「北上説」を取っているが、筆者はこの三説のどの説にも与せず、新たに「東進説」を唱えたい。

ammonia海進が発生するまで、南シナ海には「北上説」が重視するスンダランドが存在していたのと同様に、今は東シナ海と黄海の底となっている大陸棚が広大な陸地として広がっていた。筆者の考えでは、そこに生活していた人びとが13000年前以降、ammonia海進によって東進して縄文人となったのである。

1968年１月、沖縄の港川遺跡から、炭素14年代18250年前の港川原人の頭蓋骨が出土した。一方、1958年に中国広西チワン族自治区柳江県の通天岩洞窟から下あごのない柳江人の頭蓋骨が出土した。その年代は50000年ほど前であるが、身体的特徴は港川人にも近ければ、縄文人にも近い。以上の事実に基づいて、日本の学者鈴木尚氏はその著『骨が語る日本史』(注4)の第２章でこのように分析している。

> 港川人は華北の上洞人よりもむしろ華南の柳江人に一層類似性が強いので、たぶん上部更新世のころ、中国大陸の南部に、柳江人と港川人の共通の祖型であるプロト・モンゴロイドがあり、この人類はさかのぼれば北京原人のようなホモ・エレクトスまでたどることができるだろう。即ち今から18,000年も前に、柳江人や華南から北部インドネシアの新石器時代人と共通の祖先である、まだ未分化のプロト・モンゴロイド株が、当時、アジア大陸、沖縄、日本本土の三者の間に存在したと想定される陸橋を動物を追って東進した。そのうちの一群

は台湾、沖縄に上陸したが、ほかの一群は北上して遂に日本本土に達したであろう。台湾の左鎮人、沖縄の山下町洞人、港川人、大山洞人など、さらに日本本土の三ヶ日人、浜北人、葛生人のあるものは、この移住者の子孫または親戚であったろう。

鈴木尚氏の基本的な考えは、中国大陸の南部にはまず柳江人と港川人の共通の祖型をなしたプロト・モンゴロイドがあり、大陸に残った一部は柳江人となったが、東進した別の一部は港川人となったというように見受けられる。その一方で、氏はまた従来の「北上説」を受けて、港川人たちが南方から「琉球陸橋」を北上して日本列島に上陸し、縄文文化を創って縄文人と呼ばれるようになったと考え、「港川人は柳江人とはむしろ従兄弟のような関係にあると同時に、縄文人の遠い祖先と見なすことができそうである」と結論付けている。しかし、そもそも港川人の祖型は中国大陸の南部にいたプロト・モンゴロイドであり、彼らの一部がのちに東進して港川人となった以上、ほかの一部、たとえば中国南部に残った柳江人のような人びとがのちに今は東シナ海、黄海の底となっているその陸地へ進出し、13000年前から更に日本列島へと進んで縄文人になった可能性も十分あるだろう。すなわち、柳江人のような人びとはわざわざ「琉球陸橋」を用いなくても、東進して縄文人になれるのではないだろうか。鈴木尚氏の最後の結論にはこのように疑問を感じてはいるが、中国大陸の南部にいたプロト・モンゴロイドが枝分かれして柳江人と港川人になったという氏の指摘は非常に示唆的であり、筆者の「東進説」は氏の学説を大いに参考にしているのである。

思うに23000年前、東シナ海と黄海がなくそれらの底となっている大陸棚がほとんど露出していた頃、港川人と同様に柳江人から枝分かれしたけれども、港川人よりももっと柳江人に近いグループの人びとはそこで暮らしていた。彼らはすなわちのちに越族と呼ばれた古越人であったと考えられる。当時は、中国大陸は高い台地であり、日本列島は高い山脈であった。彼ら古越人たちは気温の比較的温暖な平原地帯で暮らしており、寒冷な「中国台地」と「日本山脈」に登る必要はなかった。しかしammonia海進が発生すると、海水面が次第に上昇し、13000年ほど前には、彼らの一部はすでに迫られて移転を始め、11000年前、海水面が今よりマイナス60メートルにまで達した時には、東シナ海と黄海が形成され、彼らは全員移転を余儀なくさせられたのであった。

彼らの移転コースは主に二つあったと推察される。一つは次第に平地となってきた中国大陸への後退であり、もう一つは次第に島々となってきた日本列島などへの上陸であったが、のちに中国大陸に移転してきた人々は「内越」、すなわち内陸部の越族と呼ばれ、日本列島などに上陸した人々は「外越」、すなわち海外の越族と呼ばれるようになった。もちろん、古越人が東シナ海と黄海の大陸棚で暮らしていた時期の遺留品はすべて東シナ海と黄海の底に沈んでいるので、それらについてはまだ考古学的な証拠が得られていない。しかし、日本列島や中国大陸の考古学的証拠から、自然にそう推定することができる。そしてこの推定を前提にしてはじめて、日本列島

における縄文文化の誕生のメカニズムを合理的に解釈することができるのである。

3.「外越」と縄文時代

東シナ海と黄海の大陸棚で暮らしていた古越人が13000年前～11000年前の間の海水面の急上昇によって「内越」と「外越」に分かれた後、「内越」は長江下流域で越文化を創っていた。これまで、長江下流域の越地方で見つかった「内越」の一番古い遺跡は10000年ほど前の上山遺跡であり、8000年前の跨湖橋遺跡、7000年前の河姆渡遺跡、6000年前の崧沢遺跡、5300年前の良渚遺跡などがその後に続いている。近年、日本の考古学分野では従来用いられてきた炭素14年代表記に代わって補正年代を採用する人が増え、資料によって年代測定方法がまちまちであるという問題が起こっている。炭素14年代と補正年代の間には700年ほどの開き（注5）があるが、本論においては各遺跡の年代は出典により700年の幅を念頭に置いて考察を進めていくこととする。

現在、「内越」文化の解明はまだ10000年前にしか差し掛かっていないが、一方、日本列島に上陸した「外越」の足跡については、その研究がすでに13000年前にまで到達している。長崎県には有名な福井洞穴遺跡と泉福寺洞穴遺跡があるが、福井洞穴遺跡からは、31900年前の安山岩石器、13600年前の黒曜石石器、12700年前の細石器と隆起線文土器が出土し、泉福寺洞穴遺跡からは20000年前のナイフ型黒曜石石器、14000年前の豆粒文土器、12400年前の爪形文土器が出土している。細石器と隆起線文土器および爪形文土器はいずれも縄文草創期の代表的器物であり、それらが作られた12700年前～12400年前という時期は、完全に「外越」の日本列島上陸期と一致しているのである。

日本の著名な考古学者戸沢充則氏は『考古地域史論――地域の遺跡・遺物から歴史を描く』（注6）と題する著書の第5章第1節で、縄文草創期の土器について次のように分析している。

> 日本列島に出現した初期の土器群は、約3000年間にわたって、豆粒文→隆起線文→爪形文、さらに押圧文・無文というように、器面の装飾をちがえた土器が変遷した。各土器群の間にはっきりした形式学的連続はみられず、しかもそれらの分布のしかたには、以後の縄文土器などにみられない特長がある。すなわち、豆粒文土器の確実な資料の分布は、いまのところ九州の一部に限られているが、隆起線文・爪形文土器は九州・四国から東北地方まで広い分布をもち、どの地域の資料をとってみても、まったくといってよいほど地域色をもたない同質の土器が広がっている。それはあたかも九州の一角を基点として、新しい土器をもった文化が、順次波状的に広がっていったという状況を示している。

豆粒文土器が九州の一部に限られているのに対して、隆起線文・爪形文土器は九州・四国から東北地方まで広く分布しており、隆起線文・爪形文土器を標識とした新しい文化が九州の一角を

基点として、順次波状的に日本列島全体へ広がっていったという指摘は、非常に重要である。この隆起線文・爪形文土器を標識とした新しい文化がすなわち縄文文化であるが、15000年前から始まったammonia海進と結びつけて考えると、泉福寺洞穴遺跡から出土した14000年前の豆粒文土器も、ammonia海進とかかわっていたにちがいあるまい。

13000年前以降、ammonia海進によって「外越」の古里が次第に水没してしまい、日本列島の周辺にも次第に海が形成されつつあった。そこで、「外越」の人びとは移転先として九州に上陸しはじめた。福井洞穴遺跡の12700年前の隆起線文土器と、泉福寺洞穴遺跡の12400年前の爪形文土器がその証拠である。その後も「外越」の人びとは続々と上陸し、そして12700年前から10000年前にかけて、九州の長崎一帯から各地へと拡散していった。鹿児島県には縄文草創期の栫ノ原（かこいのはら）遺跡（11500年前）があり、この遺跡から、11500年前の隆起線文土器や石斧が出土している。宮崎県の堂地西遺跡からも同時代の隆起線文土器、爪形文土器および局部磨製石斧が出土しており、これらの遺跡の隆起線文土器と爪形文土器は九州、とりわけ長崎一帯を原点とした隆起線文土器と爪形文土器の拡散過程を考える上で非常に重要な道標となっているのである。

小泉保氏は『縄文語の発見』(注7)の第4章第4節でトンボの方言分布について調査し、九州の宮崎や鹿児島一帯と東北地方との間には大きな共通点が見られると指摘している。宮崎では「アケズ」、鹿児島では「アケズ」と通じる「アケシ」か「アケソ」と発音されているが、一方、岩手県でも宮崎県と同様「アケズ」と発音されており、秋田南・宮城・福島西では「アケズ」と通じる「アケツ」、宮城北東では「アゲツ」と発音されている。南九州と東北地方の「アケズ」という非常に古い言語上の共通点は、縄文草創期以降、「外越」が長崎一帯から南九州を通り、太平洋沿岸を沿って北上していったという事実を客観的に説明しているのではないかと考えられる。

一方、福井県の鳥浜貝塚遺跡からも隆起線文土器が出土している。これは11500年前の対馬陸橋の一時的な断裂によって、長崎県の福井洞穴遺跡や泉福寺洞穴遺跡から直接日本海側を通って拡散していったものだと思われるが、しかし興味深いことに、福井より東の石川県、富山県、新潟県からは隆起線文土器が出土しておらず、この三県を越えると、山形県日向洞窟遺跡と青森県六ヶ所村表館遺跡からは隆起線文土器が、秋田県山内村岩瀬遺跡からは爪形文土器がまた出土している。この現象は、当時の対馬暖流がまだ弱く、福井県一帯にしか到達できていなかったため、青森県、秋田県、山形県の隆起線文土器と爪形文土器は福井県の方からではなく、逆に太平洋側の鹿児島県や宮崎県から太平洋をずっと東進して、津軽海峡の親潮に乗って伝わってきたことを示しているのではないだろうか。縄文中期に入ると、福井県から青森県までの地域は「こし」（越）として一体化され、玉文化を以って大いに栄えるようになったが、縄文草創期では「こし」地域がまだ形成されておらず、この時期の「外越」はただ海流にまかせて隆起線文土器(写真注1)と爪形文土器を日本各地に持っていったり、各地で焼成したりして、縄文文化を開花させたので

あった。

4．縄文土器の呼称

『長崎県の歴史』(注8)の第1章には、泉福寺洞穴遺跡について次のような紹介がある。

> 泉福寺洞穴の人びとが、相浦川中流域の岩下洞穴（佐世保市）の人びとに主導権をゆずるのは、およそ一万年前のころであった。この時期までに、泉福寺洞穴の人びとは押引文土器と細石器の使用をやめ、条痕文土器と石鏃の活用を第一・二洞で展開していた。いわゆる第四層での発見であるが、貝殻条痕を表面に施した土器があらわれるとともに、これまでの細石器は姿を消し、弓矢に使われたと思われる石鏃が登場したのである。
>
> 対岸の岩下洞第九層にも、これと同じ現象がみられた。ところが、これ以後、押型文土器が使われるようになって、岩下洞穴での生活は泉福寺洞穴のそれをしのぐようになり、旧石器時代の主役は縄文時代の主役にその地位をゆずったのである。

この引用には10000年ほど前の縄文人の世代交代が紹介されている。10000年ほど前はちょうど縄文草創期から縄文早期への転換期であり、上述の世代交代はまさに縄文時代が草創期から早期へと移行していった実情をわれわれに教えてくれている。第3節で述べたが、ammonia海進によって、11000年前の海水面が今よりマイナス60メートルに上昇した時には、古越人の古里はほぼ完全に水没してしまい、多くの古越人が続々と日本列島に流れ込んできて、「外越」になった。筆者の考えでは、これが以上の引用に紹介された10000年ほど前の世代交代の原動力であった。上述した引用部分では、縄文草創期に上陸した人びとを「旧石器時代の主役」と呼び、10000年前後に上陸した人びとを「縄文時代の主役」と呼んでいるが、実は両者とも、もともとは同じく東シナ海と黄海の大陸棚に生活した古越人であり、それぞれを「旧石器時代の主役」、「縄文時代の主役」と呼んでしまうと、両者は全く違った時代の別々のグループと誤解され、縄文時代の本質を見失う危険が生じてしまう。彼らは決して別々のグループではなく、同じく「外越」であった。そして縄文草創期から早期への時期交替は、根本的には彼ら「外越」の波及的な上陸と連動しており、縄文早期に新たに出現した押型文土器と貝殻文土器の作り手も、当然のことながら10000年ほど前に日本列島に上陸した「外越」の人びとであったと推定される。

このように確認してくると、縄文草創期と早期はまさに土器を文化的指標とした時代であったことが明らかになったわけだが、ところで縄文草創期と早期およびその後の各時期には、土器は何と呼ばれていたのだろうか？「つぼ」という語が当時あったのだろうか？

『広辞苑』によると、「つぼ」の古形は「つほ」というが、筆者の考えでは、「つほ」も縄文中期以降の合成語で、まだ一番古いとはいえない。土器の誕生は火の使用と密接にかかわっている

ので、縄文草創期や早期の土器はまず「ほ」（火）の角度で認識され、単に「ほ」と呼ばれていたのではないかと考えられる。「火」は「ひ」とも呼ばれるが、ただ「ひ」は「火」だけでなく、また「日」を表せるので、そもそも農耕開始以後の太陽神信仰にもとづいた語であると考えられる。しかし縄文草創期や早期には、日本列島周辺はまだ相当寒く、農耕できる条件がまったく整っていなかった。したがって、太陽神信仰を意味し、「火」と「日」の両方を表す「ひ」という語は当時まだ存在せず、人びとは火のことをただ「ほ」と呼んでいたと推測される。なぜなら、日本列島の「外越」と同じ祖先を持つ長江下流域の「内越」の人びとも「火」のことを「ほ」と発音しているからである。

長江下流域では、漢字は昔も今もみな越語音で発音されている。越語音では「火」のことを[hɔu]といい、和語音に直すと、そのまま「ほ」になる。もし越語音ではなく、各時代の漢語音で「火」を発音すると、上古音では[huəi]、中古音では[hua]、近世音では[huɔ]、現代音では[huo]（注9）となる。すなわち、和語の「ほ」はどの時代の漢語音にも似ておらず、唯一越語音と完全に一致している。要するに、「ほ」はもともと13000年前の古越語であり、農耕時代の和語「ひ」とはまったく関係がないのである。この「ほ」は縄文草創期の「外越」の上陸とともに日本列島に伝わってきたのだと結論づけられよう。

隆起線文・爪形文土器と押型文・貝殻文土器はともに火の中から誕生したものだから、「ほ」と本質的にかかわっていたことが容易に想像できる。しかし、火を意味する「ほ」があるだけでは、「つぼ」を意味する「ほ」はまだ生まれない。一音語の角度から見ると、「ほ」にはまた「くぼむ・ふくむ」という基本義があり、「火」の意味と「くぼむ・ふくむ」の意味が結ばれてはじめて、「つぼ」を意味する「ほ」が成立するように思われる。

前掲の『日本人の骨とルーツ』によって、アイヌ人と沖縄人が縄文人の直接の末裔であるということが実証されている。したがって、縄文草創期や早期の言葉について考察しようとすると、アイヌ語と沖縄語は大変参考になる。萱野茂著『アイヌ語辞典増補版』（注10）によると、アイヌ語では陰部・陰門のことを「ほ」といい、とくに女陰または女性の外陰部を「ぽあぱ」という。また内間直仁・野原三義編著『沖縄語辞典――那覇方言を中心に』（注11）によると、沖縄の首里方言では女陰のことを「ほ」という。実は九州の方言でも女陰のことを「ぼ」といい、その語源はいうまでもなく「ほ」であろう。アイヌ語と沖縄語と九州方言は基本的に女陰のことを「ほ」といい、音韻的には、「ぽあぱ」も「ほ」の口語的表現だと見られるが、「ほ」がなぜ女陰の意を表せるかを考えると、女陰およびその奥に位置して胎児を孕む機能を持つ子宮がポイントとして思い浮かんでくる。縄文人にとって、女陰および子宮は「くぼむ・ふくむ」という形態と機能を持つ最も本質的なモノであり、縄文土器はその形態と機能を擬えたものであっただろう。すなわち、女陰への崇拝が縄文土器を作らせる根本的な契機となったのではないかと考えられる。

『古事記』には、日本人の祖先神イザナミが火の神「ほのかぐつち」を生んだ時に「ほと」を

焼かれてなくなったことや、神武天皇が「ほとたたらいすすきひめ」と結婚したことが記されているが、「ほのかぐつち」の「ほ」は「火」を意味し、「ほとたたらいすすきひめ」の「ほ」は「火」と「女陰」の両義を兼ねている。「ほと」の「と」は「ところ」を意味しているので、「火」の「ところ」は同時に「女のところ」（女陰）でもあるという論理が『古事記』の神名や人名によって見事に実証されているが、縄文草創期や早期の土器と結びつけて考えると、この論理は『古事記』時代に形成されたのではなく、縄文草創期や早期以来の伝統的思惟にもとづいたものだと判断することができよう。

縄文中期、「つぼ」の意の「ほ」は死んだ幼児を埋葬する棺にも用いられていた。2007年11月3日、筆者は青森県の三内丸山遺跡を見学し、その資料室でそのような「ほ」（写真注2）を見た。その「ほ」は縄文中期前半（50000年前）のもので、普通の煮炊き用の「ほ」と全く同じであるが、底に近い側面に「孔」が一つ開けられている。筆者の考えでは、この「孔」はすなわち女陰を表し、つぼ全体が子宮に見立てられている。この「ほ」は「火」の意の「ほ」と女陰の意の「ほ」を同時に示し、「つぼ」誕生の秘密を明確に悟らせてくれる。

一方、長江下流域の越語を調べてみると、寧波一帯の人びとは女陰のことを「ぽぽ」という。「ぽぽ」は越語ではあるが、アイヌ語の「ぽあぱ」と共通し、その原型は疑うことなく「ほ」であろう。弥生時代以降、アイヌ人と「内越」の間には何の交渉もなかったのに、女陰を意味する語がなぜ共通しているのかと問われれば、アイヌ人の一部は縄文草創期日本列島に上陸した「外越」の末裔であるので、アイヌ人と「内族」とは「外越」を媒介として越文化を共有しているためだ、と筆者は指摘したい。

10000年前の上山遺跡、8000年前の跨湖橋遺跡をはじめ、長江下流域の「内越」のすべての遺跡から「つぼ」が出土している。「つぼ」の意の漢語は「壺」である。前掲の『漢字古今音表改訂版』によると、「壺」は上古時代と中古時代では[ɣa]、近世音と現代音では[hu]とそれぞれ発音されるが、いずれも「ほ」と通じない。しかし、「壺」の越語音は[ɦəu]であり、「ほ」と完全に一致している。「壺」の語源はヒョウタンを意味する「瓠」であり、長江下流域の越文化圏では、「瓠」に触発されて「つぼ」が焼成されたと考えられている。越語では「瓠」も[ɦəu]といい、「壺」と「瓠」の発音がまったく同様であるということがその基本的な根拠であるが、要するに、「内越」の人びとにとっても、「ほ」は火の意、女陰の意およびヒョウタン・壺の意を持ち合わせており、そして、「壺」と「瓠」の越語音を和語に直すと、また「ほ」となるわけである。筆者の考えでは、この言語的事実は、日本列島に上陸した「外越」と長江下流域に移転した「内越」が土器の焼成についてもともと同様な発想を持っていたことを物語っているのである。

もっとも、縄文草創期と早期に「ほ」と呼ばれていた縄文土器は、中期に入ると「つほ」と呼ばれるようになり、性交中あるいは出産途中の女陰をデフォルメした「つほ」（写真注3、4）が大量に作られるようになった。その背景としては、ammonia海進が早期末からピークに達し、対馬暖

流が日本海を貫通したことによって、日本列島の生活環境が大いに改善され、縄文人のかつてない出産ブームがあったことが想像される。「つほ」の「つ」は「つく」の「つ」、そして、この「つ」は「指」または指状のものを意味する。「ほ」は女陰、すなわち炎の中で擬似的な「ほ」を、指あるいは手に指状の男根石棒を持って「つく」のが「つほ」の原義であり、これが女陰デフォルメ型の「つほ」の用途であったと考えられる。このような縄文土器を使った宗教的秘儀が頻繁に執り行われたことによって、縄文中期の人口は急速に増加してきた。縄文草創期の人口は不明であるが、縄文早期の人口が約２万人、縄文前期の人口が約10.6万人であったのに対して、縄文中期の人口は一気に26.1万人にも達した（注12）。ここには人口増加と女陰デフォルメ型の「つほ」の因果関係がはっきりと認められるが、しかし縄文後期に入ると、女陰デフォルメ型の「つほ」の焼成は途絶えてしまい、人口も16万人にまで激減した。そして縄文晩期の人口はわずか7.6万人ほどしか残っていなかった。もちろん、縄文晩期に稲作が伝わると、「ほ」からまた「いなほ」という新しい意味が生まれたが、しかし本質的には、「いなほ」の「ほ」も「ふくむ」を意味し、「つほ」の意の「ほ」から派生した意味用法だといえよう。

以上、考古学的証拠と言語学的資料に基づいて、縄文草創期と早期における「外越」の日本上陸およびその後の足跡について考察し、縄文人の来歴の一部が東シナ海・黄海の大陸棚から移住してきた「外越」であったことを明らかにすることができた。

近年、日本人のミトコンドリアDNAに関する研究が急速に進んでおり、その分野の研究成果を調べてみると、筆者の結論と同じ方向性を示している意見があった。日本の有名な遺伝学学者篠田謙一氏は「遺伝子で探る日本人の成り立ち」（注13）と題する論考で、日本列島と中国黄海・東シナ海沿岸および南島諸島と密接にかかわったミトコンドリアDNAのハプログループＭ７を研究し、次のような結論を出している。

> Ｍ７ａには兄弟グループであるｂとｃが存在する。それぞれの祖先型であるＭ７は、今から５万年ほど前に成立し、ａ、ｂ、ｃの各グループは２万5,000年ほど前にそこから派生したと考えられている（図４）。この三つのグループの分布は、ａは主として日本に、ｂは大陸の沿岸、そしてｃは南方に分布していることが知られている（図６）。ここから母体となったＭ７の分布中心は当時海水面が低下して陸地だった黄海にあったと推定される。この地域に暮らしていた人の中でＭ７ａが誕生し、彼らが日本列島に移住してきたのであろう。

この引用のなかで篠田謙一氏も、もともと「陸地だった黄海」に暮らしていたＭ７ａを持つ人びとが「日本列島に移住してきたのであろう」と指摘しており、その結論は筆者が考古学的証拠と言語学的資料を分析して得た結論とほぼ同様である。もちろん、篠田謙一氏のこの結論だけでは、長江下流域における「内越」のミトコンドリアDNAがＭ７ａなのか、それともＭ７ｂなのか

がまだ分からず、今後の研究に期待するしかないが、それにもかかわらず、本論の結論が篠田謙一氏の結論と同様の方向性を示していることは互いに論証となることを意味しており、心強さを感じている次第である。

注

1．安田喜憲著『増補改訂版・世界史のなかの縄文文化』雄山閣、1998年５月。
2．陳橋駅著『呉越文化論叢』中華書局、1999年12月。
3．埴原和郎著『日本人の骨とルーツ』角川書店、1997年９月。
4．鈴木尚著『骨が語る日本史』学生社、1998年８月。
5．安田喜憲著『大河文明の誕生』第二章第五節。2000年２月。
6．戸沢充則著『考古地域史論――地域の遺跡・遺物から歴史を描く』新泉社、2004年１月。
7．小泉保著『縄文語の発見』青土社、1998年６月。
8．瀬野精一郎・佐伯弘次・五野井隆史・小宮木代良著『長崎県の歴史』山川出版社、1998年９月。
9．李珍華・周長揖編撰『漢字古今音表修訂本』中華書局、1999年１月。
10．萱野茂著『アイヌ語辞典増補版』三省堂、2002年10月。
11．内間直仁・野原三義編著『沖縄語辞典――那覇方言を中心に』研究社、2006年５月。
12．鬼頭宏著『人口から読む日本の歴史』序章。講談社学術文庫、2000年５月。
13．国立科学博物館叢書④『日本列島の自然史』第５章第４節。国立科学博物館編、2006年３月。

写真注

1．青森県表館遺跡出土、縄文草創期、高さ30.0cm、青森県埋蔵文化財調査センター蔵。横山浩一、鈴木嘉吉、辻唯雄、青柳正規編著『日本美術全集１・原始の造形――縄文・弥生・古墳時代の美術』（講談社、1994年４月）からの転写。
2．筆者撮影、三内丸山遺跡展示室保管。
3．神奈川県林王子遺跡出土、縄文中期、高さ25.5cm、神奈川県厚木市教育委員会保管。転写同１。
4．長野県海戸遺跡出土、縄文中期、高さ43.8cm、長野県岡谷市立美術考古館蔵。転写同１。

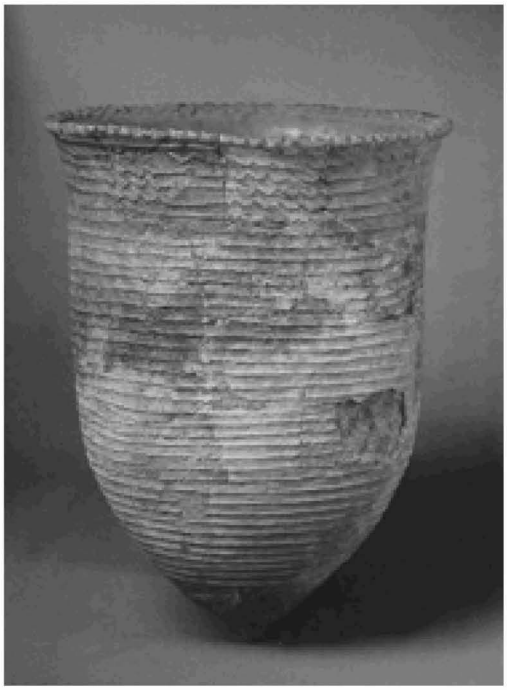

写真 1

写真 2

写真 3

写真 4

日本“绳纹人”的来历

李 国 栋

在日本历史上，13000年前至公元前300年的这段时间被称为“绳纹时代”，这个时代的文化也被称为“绳纹文化”。

迄今为止，很多日本人认为“绳纹文化”是日本的固有文化，其实不然。15000年以前，全球气候寒冷，中国大陆东侧没有东海和黄海，只有几乎全部露出的大陆架，而这片广袤的大陆架就是“绳纹人”的故里之一。

但是，地球从15000年前开始温暖化，东海及黄海大陆架随即发生了卷转虫（ammonia）海侵。到了13000年前，东海及黄海大陆架开始受到海侵的威胁，于是，生活在那里的人们开始转移。一部分人转移到长江下游，后被称为“内越”；另一部分人在日本列岛登陆，后被称为“外越”，而这部分“外越”就是最早创建“绳纹文化”的那部分“绳纹人”。本文从历史地理学、考古学、语言学、文化学以及遗传学的角度对上述结论作了充分的论证。

本文对“绳纹文化”的主要标志——“绳纹陶器”的称呼和用途进行了重点阐述，并由此揭示了“内越”与“外越”原本相通的文化本质以及“绳纹时代”发展变化的原动力。